

# 海域東南アジアにおける唐代の崑崙<sup>1)</sup>

深見純生

## The Kunlun (崑崙) in Maritime Southeast Asia during Tang Period

Fukami Sumio

Keywords:

Kunlun, Maritime Southeast Asia, Tang period, Curled hair and black skin, Maritime trade

### Summary

The toponym Kunlun (崑崙) during Tang period had multiple meanings, of which the most important was a general name for the area that was approximately same as Nanhai (南海) or South Sea. The area covered Central Vietnam, Cambodia and Thailand in the North and the Malacca Strait and further East of Java and Bali in the South. Thus, Kunlun roughly coincides with the area Maritime Southeast Asia.

It is a mistake of the Chinese documents such as Jiutangshu (旧唐書) to depict the Kunlun people as curled hair and black skin, because Southeast Asian people is mostly straight hair and brown skin. The reason of the mistake can't be pointed out clearly, but as an important background for the prevailing of the misunderstanding we can suppose the confusion of Kunlun and Kunlunnu (崑崙奴) or Kunlun-slave during Tang times. Kunlunnu with physical feature as curled hair and black skin were slaves brought by Kunlun people or from Kunlun area, however, Kunlun and Kunlunnu gradually became not to be distinguished. The confusion was accelerated by that the Kunlunnu image was loved so much in literature and arts of the time. Even demonic images were added to. The influence of the image of the Kunlunnu was so strong that Yijing's testimony from the Nanhai that most of the Kunlun people were physically same as the Chinese was neglected by the compilers of Chinese historical documents and also by modern scholars.

Freed from the spell of the Kunlunnu image, this paper presents the real features of the Kunlun people. In the Buddhist world, they were more civilized than the Chinese. They were maritime merchants who brought wealth and prosperity to the port cities such as Guangzhou. They used Malay as a lingua franca. They were skilled in shipbuilding and navigation. Their ships were sewn boat big enough, it is said, for 1000 passengers and cargoes. They sailed not only to China but also to India. The Chinese in Guangzhou in the 9<sup>th</sup> century learned the skill to build the sewn ship from Kunlun people.

キーワード：崑崙、海域東南アジア、唐代、卷髪黒身、海上交易

## はじめに

崑崙には西域の崑崙と南海の崑崙があり、前者が伝説に彩られた半ば想像上の山であるのに対して、後者はおもに南北朝期から唐代および宋代の史料に現れる、実在の国々とその人々である。したがって南海の崑崙は当該時期の海域東南アジア史を再構成するための重要な手がかりの一つであるのだが、その史料の記述には混乱あるいは錯誤を含むものがあり、歴史像再構成の妨げになっている。本稿はこの混乱を解きほぐして唐代の崑崙の実像に迫ろうとするものである。

崑崙全般に関する最も重要な研究はフェランの長大な論文である〔Ferrand 1919〕<sup>2)</sup>。この論文は非常に大きな時間的・空間的枠組みの中でのコンロンの語の分布と流布に主な関心があって、各々のコンロンがどのような人々、国々であるかを論じるわけではないので、本稿と問題意識を異にする。とはいえ、その論文の最初の部分で漢籍に現れる多様な崑崙の地理的な位置を次の七つに区分するのは本稿の出発点として有益である。a ガンジス川より東のインドとインドネシアのいくつかの島。b コンダオ島（南部ベトナム沖）。c クーラオチャム島（中部ベトナム沖）。d チャンパー、古代のカンボジア、ミャンマー、マレー半島（頓遜と盤盤）、スマトラ、ジャワの崑崙国。e 南詔近く of 崑崙国。f 広西の崑崙関。g アフリカ東岸とマダガスカル島。d が東南アジアの大陸部から島嶼部にかけての広域なのに対してその他はすべてその内外の個別の地名である。

このうち本稿の対象となるのは d である。ただしミャンマー（『新唐書』驃伝の小崑崙等々）は海域ではない（おもに雲南経由の内陸路で中国に通じる）ので本稿の対象外である。また王や高官の名前や称号の崑崙（南北朝期の扶南・頓遜・盤盤）も独自に扱うべき事柄であるので本稿の対象外としたい<sup>3)</sup>。この d の崑崙の内実に関する詳細な研究は桑田六郎「南洋崑崙考」「崑崙奴と僧祇奴」および松田寿男「崑崙国攻」である〔桑田 1993ab、松田 1987〕。いずれもたいへん参考になるとはいえ、後に述べるようにその議論と結論には従いがたい。

唐代の崑崙に関してまず検討すべきは、すべての論者が取りあげる『旧唐書』巻 197 林邑伝の末尾の「自林邑以南、皆卷髮黒身、通号為崑崙（林邑より南はみな巻き毛で色黒であり、崑崙と総称する）」という一文である。ここで問題は、卷髮黒身という形質の特徴が東南アジアにほとんど適合しないことである。桑田と松田はこの卷髮黒身の人々をマレー系と主張するが、これは筆者には受け入れがたい。マレー系は直髮褐身であるので、この一文に誤りが含まれているというべきである<sup>4)</sup>。

本稿では第 1 節で上記の一文の卷髮黒身について検討し、唐代に卷髮黒身の崑崙奴というイメージが広く共有されたことを確認したうえで、美術史家浅湫毅の指摘（浅湫 1996）と義浄の記述にもとづいて、そのイメージから崑崙を解き放ち、崑崙の概念を明確にしたい。そして第 2 節で唐代の南海の崑崙の実相を史料に即していくつかの側面から取りあげる。なお、標題の海域東南アジアは「海で結ばれた東南アジア」というほどの意味であるが〔生田 2004: 132 参照〕、本稿では上記のように海にベンガル湾を含まない。

# 1 卷髪黒身の再検討

## (1) 南海諸国は卷髪黒身か

最初に『旧唐書』の上記の一文「自林邑以南、皆卷髪黒身、通号為崑崙」の前半が他の史書にどのように表現されているか確認しておく。表1は、正史では南蛮（南夷、海南）伝のある『晋書』から『新唐書』までそして南方諸国を多く取り上げる『通典』などの計13の史書において

表1 卷髪黒身の諸国

史書	林邑	扶南	真臘	婆利
『晋書』 卷 97	以黒色為美	人皆醜黒拳髪	伝なし	伝なし
『宋書』 卷 97	該当記事なし	該当記事なし	伝なし	伝なし
『南齊書』 卷 58	人色以黒為美、南方諸国皆然	該当記事なし	伝なし	伝なし
『梁書』 卷 54	其人深目高鼻、髪拳色黒	其国人皆醜黒拳髪	伝なし	該当記事なし
『隋書』 卷 82	其人深目高鼻、髪拳色黒	伝なし	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	該当記事なし
『南史』 卷 78	該当記事なし	其国人皆醜黒拳髪	伝なし	該当記事なし
『北史』 卷 95	其人深目高鼻、髪拳色黒	伝なし	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	該当記事なし
『通典』 卷 188	其人深目高鼻、髪拳色黒	人皆醜黒拳髪	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	其国人皆黒色、穿耳附璫
『旧唐書』 卷 197	其人拳髪色黒	伝なし	該当記事なし	其人皆黒色、男子皆拳髪
『唐会要』 卷 98・99	該当記事なし	伝なし	該当記事なし	人皆黒色、穿耳附璫
『太平御覧』 卷 786・787	其人深目高鼻、髪拳色黒	其国人皆醜黒拳髪	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	該当記事なし
『太平寰宇記』 卷 176・177	其人深目高鼻、髪拳色黒	皆醜黒拳髪	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	其国人皆黒色、穿耳附璫
『新唐書』 卷 222 下	髻髪	其人黒身髻髪	該当記事なし	俗黒身、朱髪而拳、鷹爪獸牙、穿耳傅璫

海域東南アジアに位置したと考えられる諸国の伝を見た結果を示すものである。卷髪黒身ないし類似の記事が見られるのは林邑・扶南・真臘・婆利の4国にすぎない<sup>5)</sup>。この他に婆利の東にあるという羅刹にも類似の記事があるが、羅刹は正史に伝がないので表に含まない。婆利と羅刹については後に取りあげる（(4) 項）。これら以外の諸国は卷髪黒身とは無縁であるらしい。とすると、『旧唐書』のこの一文は根拠不明の誤解であるか、少なくともたいへん誇張されていることになる。

林邑はオーストロネシア系、扶南・真臘はオーストロアジア系の人々が中心と考えられており（扶南はオーストロネシア系説もある）、中国人と同じ直髪褐身のはずである。林邑・扶南・真臘は南海諸国のなかでは中国との交流が比較的盛んなので、この3国を卷髪黒身と誤るのは不思議である。林邑について『南齊書』に卷髪には触れずに、「人色以黒為美、南方諸国皆然（色

が黒いのが美しいとされる。南方諸国は皆そうである)」という独自の一文がある。それはともかく、『梁書』から『太平寰宇記』までの7件とも「髮拳色黒」と同文で、さらにそのうち6件では「深目高鼻（眼窩が窪み、鼻が高い）」という。この容貌は東南アジアには適合せず、不思議な記事である。扶南についても『晋書』から『太平寰宇記』まで6件が同文で「皆醜黒拳髮（みな醜く、黒く、巻き毛である）」という。真臘もまた『隋書』から『太平寰宇記』まで5件とも「人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髮垂耳（人は小柄で色が黒く、女性には白い者もいて、みな巻き毛で耳が垂れている）」という同文である。以前の史書からの引用が繰り返されているのは明らかだが、それぞれの最初の記事が何を根拠にしているか筆者には不明である。

このうち扶南については、3世紀半ばに呉の孫権が朱応と康泰を扶南に派遣したことから直接の見聞が得られ、いくつかの書物が書かれた。それらはすべて逸書となったが、我々はこの書物に引用された断片的な文章を利用することができる。それらを見る限りでは扶南の人を巻髪黒身と表現するものはない。さらに、こうした書物のひとつ万震『南州異物志』（『太平御覧』巻790所引）には「扶南海隅、有人如獸、身黒若漆、齒白如素（扶南の海辺の一隅に獣のような人がある。漆のように色黒で歯は真っ白である）」という一節がある。巻髪とはされないが、黒さの目立つ少数派はおそらくいわゆるネグリティ系の人であろう。扶南の人は色黒と認識されていない可能性が高いといえよう。この記事との関係は不明だが、『通典』巻188に「薄刺国、隋時聞焉、在拘利南海湾中。其人色黒而齒白、眼正赤、男女並無衣服（薄刺国。隋代に知られた。拘利の南の海湾に位置する。その人は色黒で歯は白く、目は真っ赤であり、男女とも衣服はない）」という記事がある（『太平御覧』巻788、『太平寰宇記』巻177ほぼ同文）。巻髪には触れていないが色黒であるという。拘利はふつうマレー半島北部に位置比定されるので、この色黒の人々はタイ湾またはアンダマン海のネグリティ系であろう。

他方で4世紀の中国で崑崙は色黒というイメージが共有されていることは『晋書』巻32孝武文李太后伝の「時后為宮人、在織坊中、形長而色黒、宮人皆謂之崑崙（太后が宮中に入り、まだ織坊にいた頃、背が高くて肌の色が黒かったためまわりから崑崙と呼ばれた）」という記事から明らかである<sup>6)</sup>。また晋代の高僧道安は色が黒いため「崑崙子」「漆道人」などと呼ばれた（慧皎『高僧伝』巻5道安伝）。5世紀には崑崙奴の語が見える。『宋書』巻76王玄謨伝に「〔孝武帝〕又寵一崑崙奴子、名白主。常在左右（〔孝武帝は〕崑崙奴の子を寵愛し、白主となづけて、常に身近においていた）」という。5世紀の南朝には崑崙舶も来ていた。『南齊書』巻31荀伯玉伝に「又度絲錦、与崑崙舶營貨（また絹糸・錦をはかり、崑崙舶と取引した）」という。これが崑崙舶の初出である〔神田1931〕。

## (2) 崑崙奴

南北朝時代に崑崙に言及する史料は多くなく、巻髪黒身とするのは史書では林邑伝と扶南伝である（表1）。林邑や扶南に崑崙と関わりのある記述があるとはいえ<sup>7)</sup>、林邑や扶南が崑崙と呼ばれたわけではなく、また崑崙は色黒ではあっても巻髪かどうか不明であるし、後の史料にいう「漆黒」は文字どおりなのか誇張なのか判然とせず、したがってどの程度黒いのかもわからない。しかし唐代になると、崑崙に関する記述だけでなく崑崙奴が資史料におおく登場するとともに、崑崙人は巻髪黒身さらには悪鬼羅刹のごとき容貌というイメージが定着していく。浅

湫によれば、こうした崑崙人に関する認識（誤解）は唐代に多くもたらされた崑崙奴を媒介として生じたのであった。崑崙奴は本来崑崙地域からあるいは崑崙人によって連れてこられた奴隷であるが、いつしか崑崙人と崑崙奴が区別されなくなり、崑崙人もまた巻髪黒身などの形質的特徴をもつとみなされたのである〔浅湫 1993: 64-68; 1996: 12-14〕。

崑崙奴は唐代には文学作品においてよく知られた存在であつたらしい。小説によく登場し、なかでも裴鏘「崑崙奴」はよく読まれたとのことで、わが国でも黒田真美子による原文、翻訳、解説がある〔黒田 2006: 436-451〕。磨勒という名の崑崙奴の縦横無尽の活躍を肯定的に描いており、家内奴隷の磨勒は主人思いで心優しく、明敏にして、強力、敏捷の人である。黒田の紹介を見る限り、磨勒の形質的特徴は描かれていないが、これは当然のこととして省略されたと思われる。それほどに崑崙奴には確立されたイメージがあるのだろう。そして黒田は解説において『旧唐書』林邑伝の「巻髪黒身」などを引いて身体的特徴や出身地などを説明している<sup>8)</sup>。

崑崙奴は詩にも詠まれた。張籍「崑崙児」（『全唐詩』巻 385）や蘇頲「詠崑崙奴」（同巻 74）といった詩が知られている。浅湫はそこに示される崑崙奴の身体的特徴を「肌色が漆黒で、耳が匙のように大きく、耳朶に穴をあけ金環を下げ、髪は縮毛である」とまとめている。浅湫はまた唐代の明器や壁画などの美術資料および日本の伎楽面の崑崙などの美術作品にもとづいて、崑崙奴の形質的特徴を分析している。それを要約的にいえば、背が低く色が黒く縮れ毛である<sup>9)</sup>。こうした形質的特徴は東南アジアの大部分に該当せず、浅湫はネグリティ系の人々と推測する。すなわち、南海諸国の総称である崑崙とそこから連れてこられた崑崙奴が混用されたと解釈するのである。伎楽の崑崙<sup>10)</sup>と呼ばれる面が鬼の形相で制作されたのは、この混用が背景にあって、崑崙奴のイメージに基づく面に崑崙の名が与えられたのである〔浅湫 1996: 11〕。ただし、肌色が文字どおり漆黒とするとネグリティ系ではなくアフリカ黒人かもしれない。次項で取りあげるように、崑崙奴の形質的特徴は単一でなかったかもしれない。

### (3) 悪鬼羅刹イメージ

崑崙奴が鬼形で描かれることと関連して、唐代の崑崙には悪鬼羅刹のイメージがあることを確認しておきたい。多くの論者が取り上げる慧琳『一切経音義』（807年成立）が崑崙を悪鬼羅刹のイメージで捉える典型例であろう。その巻 81 において、義浄『大唐西域求法高僧伝』の大津伝に見える崑崙語（第 2 節（2）項参照）に次のような解説が施されている。

崑崙語。上音昆、下音論。時俗語亦曰骨論。南海洲島中夷人也。甚黒裸形。能馴伏猛獸犀象等。種類数般、即有僧祇・突弥・骨堂・閻蔑等。皆鄙賤人也。国無礼儀。抄却為活、愛啖食人。如羅刹悪鬼之類。言語不正異於諸蕃。善入水竟日不死。

崑崙語。上の音は昆、下の音は論。俗に骨論ということもある。南海の島々のなかの野蛮人である。たいへん色が黒くて裸体である。猛獸や犀や象などを飼ひ馴らすことができる。数種類に分かれ、僧祇・突弥・骨堂・閻蔑などがある。みな卑賤の人であり、国には礼儀がない。略奪を生業とし、人を食べるのをたいへん好む。羅刹悪鬼の類のようである。言うことが信用できないのは諸外国と異なる。潜水が巧みで一日潜っていても死なない。

これを検討する前に、いくつかの用語の意味を確認しておきたい。

崑崙は骨論と書くこともあるというが、慧琳は同書卷 61 の破舶の条では骨論を造船と航海に優れた人々として描いている（第 2 節（4）項参照）。義浄が『南海寄帰内法伝』で述べる骨崑もその異字であろうが、仏教世界における文明人として登場する（第 2 節（1）項参照）。悪鬼羅刹イメージは当てはまらない。

崑崙には僧祇・突弥・骨堂・閩蔑など数種類あるという。このうち僧祇は一般にザンジ Zangi / Zangi の音訳でアフリカ黒人のことと解されている。唐代の史書には室利佉逝と訶陵という南海の有力国が朝貢の際に僧祇奴を献じたことが記されている<sup>11)</sup>。中国でおおいに好まれたのであり、朝貢だけでなく民間の交易によってももたらされたことであろう。

突弥は他の史料に見えないが、南インドのタミル Tamil とする説がある〔陳 1986: 612〕。中国人から見ればタミル人は色黒かもしれないが、字音の類似に基づく説であり、他に手がかりがないので、真偽定かでないとしておきたい。

骨堂も他の史料に見えないが、貞観十年（636）に朝貢した甘棠国に同定する説がある〔陳 1986: 250〕。南海の甘棠国と西域の朱俱波国が同日に朝貢してきたことを太宗がおおいに喜んだという<sup>12)</sup>。その位置などに関しては「甘棠国、在大海之南、崑崙人也」つまり南海の崑崙人というだけで他に手がかりがない。また骨堂は後述の元開『唐大和尚東征伝』に見える骨唐の異字かもしれない（第 2 節（3）項参照）。骨堂＝甘棠＝骨唐の同定が成り立つなら、骨堂は 636 年に朝貢した崑崙の一国であり、8 世紀半ばの広州に居住していた崑崙人の一種である。ここにも悪鬼羅刹イメージはない。

閩蔑は同じ『一切経音義』の卷 100 にある閩蔑の異字でクメール Khmer のこととされる。

閩蔑。（中略）崑崙語也。古名林邑国。於諸崑崙國中、此国最大。亦敬信三宝也。

閩蔑。（中略）崑崙語である。古くは林邑国を名とした。この国は崑崙諸国の中で最大である。仏教を篤く信じる。

林邑と混同されているのは奇妙だが、林邑を邑心とする版本があり、邑心の原音を伊奢、伊賞のそれと同音とみなして伊奢那城、伊賞那補羅つまり 7 世紀ころの真臘の都であるイーシャーナプラ（サンボール・プレイ・クックの都市遺跡）に同定する説がある〔陳 1986: 421〕。この邑心に関する説の当否はともかく、『旧唐書』真臘伝は冒頭で「崑崙之類」といい、また真臘国は吉蔑（クメール）国と呼ばれるというので、クメール＝真臘を崑崙とみなすことができる。真臘が崑崙諸国中の最大であるとするのは、崑崙が『旧唐書』林邑伝末尾にいうように林邑以南の総称であるとするれば、無理がないといえよう。

さて、慧琳の崑崙語の条は実際には崑崙語ではなく崑崙を説明している。崑崙は色のとても黒い野蛮人、卑賤な食人種で悪鬼羅刹の類とされる。また猛獣調教や潜水に秀でていたといった異能があるとされる。これは崑崙人というより崑崙奴の説明というべきであろう。そして崑崙には数種類あってそのひとつが閩蔑であるという。閩蔑＝クメールという同定が正しいとすれば、クメール人は崑崙奴の形質的特徴を持たないのであるから、当然崑崙奴ではありえない。じじつ、閩蔑の条や『旧唐書』真臘伝では崑崙である真臘を（色黒、巻髪を別にすれば）悪鬼

羅刹の類とする記事はないばかりか、閻魔の条は仏教を篤く信じるというから、いわば文明人の扱いである。慧琳の崑崙語の条では崑崙の説明において悪鬼羅刹イメージをめぐる混乱がある。とりわけクメールをめぐる崑崙語の条と閻魔の条には明らかに矛盾がある。この混乱、矛盾は崑崙人と崑崙奴を区別しないことから生じていると考えられる。崑崙人を崑崙奴とみなしてしまう混乱は『旧唐書』林邑伝の「自林邑以南、皆卷髮黒身、通号為崑崙」にも受け継がれているといえよう。

#### (4) 悪鬼羅刹か——婆利国と羅刹国

崑崙と崑崙奴の混用に関わるかもしれないこととして、表1の史書の南蛮伝の諸国で卷髮黒身という以上に悪鬼羅刹のイメージをもたせる記述がわずかながらあることを確認しておきたい。それは婆利国とその東にあるという羅刹国である。ただし、いずれも崑崙とは明記されていない。

その一端は表1の『新唐書』婆利伝に表れていて、「俗黒身、朱髮而拳、鷹爪獸牙、穿耳傳瑠（人々は色が黒く、髪は赤くて縮れていて、鷹の爪と獣の牙をもち、耳に孔をあけて耳飾りを付けている）」という。この記事は『新唐書』巻222下環王伝の付伝である婆利伝に書かれているのだが、じつは婆利の東に位置する羅刹の記事が婆利の伝に入り込んだものである。「朱髮」「鷹爪獸牙」は他書の婆利伝に見えず、もっぱら羅刹伝に見える記事である。『通典』巻188の羅刹国伝の全文をあげる。

羅刹国在婆利之東。其人極陋，朱髮黒身，獸牙鷹爪。時与林邑人作市，輒以夜，昼日則掩其面。隋煬帝大業三年，遣使常駿等使赤土国，至羅刹。

羅刹国は婆利の東に位置する。人々の容貌はきわめて醜く、髪が赤くて色が黒く、獣の牙と鷹の爪をしている。時々林邑の人と交易するに、それは夜におこない、日中は顔を覆っている。隋の煬帝は大業三年（607）、常駿などを赤土国に使いに行かせ、羅刹に至った。

「其人極陋」から「掩其面」までは『唐会要』巻99の羅刹国の条、『太平御覧』巻788羅刹国伝、『太平寰宇記』巻177羅刹国伝もほぼ同文である。婆利の位置は東部ジャワに比定して大過ないであろう。バリ島を含んでいた可能性もある。この記事には林邑の交易圏が羅刹まで伸びていること、交易は夜におこなうことその他いくつか興味深い事柄があるが<sup>13)</sup>、本稿の論旨と直接の関係はないのでこれ以上立ち入らないことにする。筆者別稿（深見2022）を参照されたい。

羅刹という国名の由来は記されていないが、音訳だとしても他の文字を選ぶこともできるのであり、その面貌から発想した意識の可能性が高いだろう。いずれにせよ、南海には例外的とはいえ、慧琳の悪鬼羅刹イメージに通じるような国も記されているのである<sup>14)</sup>。またすでに記したようにネグリト系とおぼしき色黒の人々の存在も示唆されている。

#### (5) 義浄にみる広狭2種の崑崙

崑崙奴と崑崙の人々は区別すべきであり、卷髮黒身は前者に限られるという浅湫の指摘は、同時代の義浄によって裏付けられる。その『南海寄帰内法伝』巻1の南海諸洲に関する原注に

次の記事がある。義浄は周知のように671年広州を発して海路インドに至り、ナーランダーで長年の研鑽の後、中国に直帰せずに687～694年の7年間室利仏逝（シュリーヴィジャヤ）すなわちスマトラのパレンバンに滞在して訳経と著述に従事した。この間の692年帰国する大律師に託して中国にもたらされたのが本書である。南海経験の長い義浄が当時の基軸的港市である室利仏逝において記した貴重な証言である。訳文は宮林訳を参照した〔宮林2004: 14-15; 王1995: 17〕。

諸国周囲、或可百里、或数百里、或可百馭。大海雖難計里、商船慣者准知。良為掘倫初至交広、遂使摠喚崑崙国焉。唯此崑崙、頭捲体黒、自余諸国、与神州不殊。赤脚敢曼、摠是其式、広如『南海録』中具述。

これら（南海の）諸国の周囲は、ある場合は百里ばかり、ある場合は数百里、ある場合は百馭ばかりである。大海は距離を測るのが困難であるとはいえ、商船に慣れたものなら准（おおよそ）は知ることができる。良（まこと）に掘倫人が初めて交州・広州にやってきたことが、やがて（南海諸国を）すべて崑崙国と呼ばせることになった。ただこの崑崙（つまり掘倫人）だけが巻き毛で色黒であって、その他の諸国は中国と異なる。裸足でサロンをまとるのがすべての式（きまり）であり、（そうしたことは）広（あまね）く『南海録』の中でつぶさに述べておいた。

巻髪黒身に関して論旨は明快である。南海諸国が崑崙国と総称されているが、その一部分だけが「頭捲体黒」であり大部分は中国と同じであるという。この論旨に照らして引用中程の「此崑崙」は掘倫をさしている。掘倫人が最初に交州・広州にきたとされるが、このことはここでのみ記され他書に見えないので確認の術がない。義浄は『南海録』において南海の風俗を詳述したというが、残念ながら逸書である。

義浄によれば、崑崙には南海諸洲の総称としての崑崙と、その一部分の巻髪黒身という形質的特徴をもつ崑崙という広狭2つの語義があるのである。とすれば、表1のように林邑・扶南・真臘を巻髪黒身と見るのは誤解であると指摘しているのと同じことである。

義浄のこの記事に関する研究史を少し確認しておこう。本書は国際的にはタカクス（高楠）の英訳によりよく知られている。タカクスは「良為掘倫初至交広、遂使摠喚崑崙国焉」の一文があまり明快でないとして崑崙の語にもとくに注釈を加えているが、「自余諸国、与神州不殊」については特段の解説はない〔Takakusu 1896: 11-12〕<sup>15)</sup>。

フェランは「良為掘倫」から「摠是其式」までを取り上げ、タカクスが崑崙を Kun-lun (Pulo Condore) と訳したことを問題視しコンドル島ではないことを論じるが、「自余諸国、与神州不殊」にはとくに注目しない〔Ferrand 1919 Mars-Avril: 243-244〕。

桑田は上記引用のうち「良為掘倫初至交広、遂使摠喚崑崙国焉」のみを取りあげ、これを崑崙という語の起源に関する一説として論じる〔桑田1993a: 68-70〕。そして「義浄が崑崙と云ふ総称は掘倫州即ち Pulo Condore の名から起って居ると云って居る」という〔桑田1993c: 178〕。これは「頭捲体黒」に関する義浄の指摘を崑崙起源論にねじ曲げるものであり容認できない。そして桑田は下記の松田論文を参照した上でなお義浄の「唯此崑崙、頭捲体黒、自余諸国、与

神州不殊」にまったく触れていない〔桑田 1993c〕。

松田は桑田が無視した部分を含めて「諸国周囲」から「摠是其式」までを引用したうえで、次のように述べる〔松田 1987: 263-264〕。

一見、南海諸洲を以て崑崙国と総喚したかに思われるが、そうではない。神洲（シナ）と似た諸国の間に「頭捲体黒」なる一群があり、それを崑崙と称したというのであって、旧唐書林邑伝の「自林邑已南、皆卷髮黒身、通号為崑崙」と全く同趣である。

松田の論文には当時の常として日本語訳がついていないので、この原文をどのように読んだのかわからないが、いずれにせよ、『旧唐書』林邑伝の一文と同趣であるというから、義浄の趣旨を取り違えているというべきである。そして松田は「いうまでもなく卷髮黒身はインドネシア或はマレイシア系の特色である」との前提のもとに崑崙をマレー系の人々をさすと断じる<sup>16)</sup>。

かくして義浄の指摘は史書に反映されず、後世の学者にも看過され、崑崙は卷髮黒身であるという誤解はおもに『旧唐書』林邑伝をとおして現在まで受け継がれてきた。

#### (6) 義浄の南海について

義浄のいう南海の範囲について確認しておきたい。周知のように義浄は『南海寄帰内法伝』の先の引用の直前の原注において次のように南海諸洲を列挙している。

従西数之、有婆魯師洲、末羅遊洲、即今尸利仏逝国是、莫訶信洲、訶陵洲、呬呬洲、盆盆洲、婆里洲、掘倫洲、仏逝補羅洲、阿善洲、末迦漫洲。又有小洲、不能具録也。

西からこれ（南海諸洲）を数えるなら、婆魯師洲、末羅遊洲、すなわち現在の尸利仏逝国である、莫訶信洲、訶陵洲、呬呬洲、盆盆洲、婆里洲、掘倫洲、仏逝補羅洲、阿善洲、末迦漫洲がある。また小さい島があるのだが、すべてあげることはできない。

これら地名の位置は参照しうる史料が少ないため比定困難なものが多い。ここでは異説もあるが次のようにしておきたい。婆魯師はスマトラ北部のバルス、末羅遊はスマトラ南部のマラユ（位置はパレンバン）、莫訶信は不明、訶陵と呬呬は中部ジャワ、盆盆は不明、婆里は前記の婆利と同じで東部ジャワ、掘倫については次に述べる。仏逝補羅、阿善、末迦漫は不明。概括的に見てスマトラからジャワを経てインドネシア東部におよぶといえよう。

掘倫は『南海寄帰内法伝』で3回述べられている（1回は掘淪）。第一に、上記の崑崙に関する混乱の元になったという掘倫、第二にこの南海諸洲の列挙のなかであり、その位置はジャワ島またはバリ島より東に求めることになる。第三は巻3第27章の先体病源の条において丁香（丁香子、クローブ）が掘淪国に生じるとする。丁香的産地は周知のごとく18世紀までマルク諸島に限られていた。かくして、掘倫はマルク諸島ないしその近辺の巻き毛で色黒の人々ならば、パプア系ないしメラネシア系が考えられるが詳細は不明である。

ここで義浄における南海概念を確認しておく必要がある。義浄は上の崑崙に関する引用に続く部分で、跋南国つまり元の扶南の位置を「瞻部南隅、非海洲也（瞻部洲の南の隅であって島

ではない)」と述べている。また『南海寄帰内法伝』の別の箇所（巻2第10章）で瞻部洲すなわちインドの地理的範囲を、莫訶菩提（Mahābodhiつまりボードガヤーにある大覚寺）を中心として四方を説明するなかで、東は臨邑（林邑、チャンパー）に至るまでという〔宮林2004: 122; 王1995: 91〕<sup>17)</sup>。義浄の地理観では林邑と扶南はインドであって南海ではないのである。今日の東南アジアを大陸部と島嶼部に分ける地理観に似ている<sup>18)</sup>。一般にはたとえば正史の南蛮伝の諸国が南海とみなされていたであろうから<sup>19)</sup>、林邑・扶南・真臘など大陸部諸国も南海に属する。義浄の地理観における南海は特異である。

ここで問題は崑崙が大陸部にも存在することである。すでに述べたように真臘は崑崙であり、崑崙諸国の中で最大とされる<sup>20)</sup>。また貞観十二年(638)に朝貢してきた独和羅国(ドヴァーラヴァティー)を「南方荒外崑崙之類(南方の僻地の崑崙の類である)」とよぶ史料がある(『冊府元龜』巻970)。大陸部のクメール系を中心とする真臘やモン系を中心とする独和羅も崑崙であるから、崑崙の範囲は大陸部も含んでいるのである。義浄のいう南海は島嶼部に限定されるため前項(5)で彼がいう崑崙も島嶼部に限定されることになるが、一般には南海と崑崙は大陸部の一部を含んでいる。崑崙は今日の用語では海域東南アジアがふさわしいという示唆が得られる。

## 小結

南海諸国の人々を卷髮黒身とするのは史書の誤りである。彼らはオーストロネシア系(義浄のいう南海諸洲)やオーストロアジア系(真臘や独和羅)の人々であり、中国人と同じ直髮褐身である。卷髮黒身とみなす誤りが生じた要因としてネグリト系の人々やジャワ島より東方の悪鬼羅刹イメージの人々の存在があるのかもしれないが詳細は不明である。この誤りの背後に崑崙と崑崙奴の混用がある。崑崙からもたらされた奴隷である崑崙奴が崑崙一般と混同されたのであり、この混乱は鬼のような形象の崑崙奴のイメージが文学作品や美術作品で愛好されたために増幅されたのである。

『旧唐書』林邑伝末尾の「自林邑以南、皆卷髮黒身、通号為崑崙」は「皆卷髮黒身」を除外するなら、「林邑以南は崑崙と総称する」というのである。この一文はその前の林邑伝の文章と脈絡がなく、むしろ林邑に続く婆利、盤盤、真臘、陀洹、訶陵、墮和羅、墮婆登という南蛮の7国の伝の導入文のように見える。とすれば、まさに崑崙は南蛮と同義ということになる。なお『旧唐書』真臘伝は真臘を「崑崙之類(崑崙の類)」といい、また「風俗被服与林邑同(風俗や被服は林邑と同じ)」というので、林邑も崑崙に含まれると理解できる。かくして、崑崙は南蛮(南海)と同義の広域地名であり、その範囲はおおむねフェランのdと重なるが、個々の崑崙国の集合というよりはその全体の総称である。今日の用語では海域東南アジアに近いであろう。

## 2 崑崙の諸相

崑崙奴の呪縛から解放されて崑崙およびその異字と思われるものが史料にどのように登場するか検討し、その実相に迫ってみたい。史料に記される崑崙は、他に手がかりがないと海域東南アジアのどの国のことかわからないのだが、東南アジア史の再構成の素材としてその実態を確認しておく必要がある。

### (1) 骨崙国の水時計とサンスクリット語——中国より優れた仏教国

まずは義浄を続ける。義浄は『南海寄帰内法伝』では既述の崑崙、掘倫のほか、骨崙を2回述べている。その巻3第30章の旋右観時（右繞論と計時法）では、インドの諸寺の漏水器（水時計）を解説した後に、次のように骨崙国の漏水器を紹介している〔宮林 2004: 312; 王 1995: 170〕。

若南海骨崙国、則銅釜盛水、穿孔下流、水尽之時、即便打鼓。一尽一打、四椎至中、齐暮還然。夜同斯八、惣成十六。亦是国王所施。

南海の骨崙国の如きでは、銅釜に水を盛り、孔を穿って下に流し、水が尽きた時に太鼓を打つ。1度尽きれば1度打ち、4回打つと南中になる。（午後）日の暮れるまでまた（午前中と）同様である。夜も（昼と）同じで8回であり、全部で16回である。（インドと同じく）国王の奉納したものである。

義浄は日時計のように天候に左右されずに正確に時を知ることができて出家者の生活規律に有益であるという水時計の長所を述べ、季節による水量の調節には高度な技術の必要なことなどを紹介する。そして彼はすべての寺に水時計を置くインドや骨崙国の優位性を主張している。インド以外で取りあげているのは骨崙国のみである。この骨崙国は具体的には彼が7年間滞在したシュリーヴィジャヤをさすのかもしれない。

次は同書の巻4第34章の西方学法（サンスクリット語文法学）の条の割注である〔宮林 2004: 343-344; 王 1995: 187〕。

然而骨崙速利、尚能摠読梵經、豈況天府神州而不談其本說。故西方讚云、曼殊室利現在并州、人皆有福、理應欽讚、其文既広、此不繁録。

ところで、骨崙・速利でさえ、みなサンスクリット語の經を読むことができる。いわんや天府神州（中国）にしてどうしてその（ブツダの）本来の説を（梵語で）談じないのであろうか。故（ことさら）にインドでも讚歎して言っている。「曼殊室利は現に并州にいませり、（中国の）人はみな福があり、理として欽讚すべし」と。その（中国讚歎の）文は既（みな）大きいので、ここには詳しく記さない。

速利は中央ユーラシアの商業民として有名なソグド Sogd とされる〔宮林 2004: 123, 136〕。論旨は明快で、中国人もサンスクリット語で經典を理解すべきであると主張している。南蛮の骨崙や西戎の速利にも劣るといふ。

仏僧義浄はこのように骨崙の中国に対する優位性を認識していた。これは義浄がシュリーヴィジャヤの仏教教学の内容や僧侶の規範がインドと同じと強調するのと符合する。すなわち、彼が訳した『根本説一切有部百一羯磨』巻5の割注の中で次のようにいふ。

此仏逝廓下、僧衆千余、學問為懷、並多行鉢。所有尋讀、乃与中国不殊、沙門軌儀、悉皆無別。若其唐僧欲向西方為聽讀者、停斯一二載、習其法式、方進中天、亦是佳也。

シュリーヴィジャヤの都では僧侶が千人以上もいて学問にいそしみ、また托鉢にでる者が多い。彼らが究めようとする書物はすべて中国（インド）のものと同様で、出家者の儀式のやり方もまたすべて同じである。唐の僧侶で西方（インド）へ行って学問をしようとする者がいれば、そこに1、2年滞在して、その仏法の方式を学んだ後に初めて中天（中インド）に進むのもよいことである。

義浄の他にもここに多年滞在する中国の僧侶がいたこと、彼らがサンスクリット語のみならず崑崙語にも通曉したことは次項に見るとおりである。なお『唐大和上東征伝』によれば、渡日に成功した鑑真に従ってきた24人のなかに軍法力という名の崑崙国人が含まれており、その背景にはおそらく崑崙の仏教教学の水準の高さがあるのだろう。

## (2) 崑崙語——海域東南アジアの共通語

『南海寄帰内法伝』と同じく692年に中国にもたらされた義浄『大唐西域求法高僧伝』には崑崙や掘倫、骨崙の語は見られないが、崑崙語・崑崙音が計3回述べられている。

その運期伝に次のようにいう〔足立1942: 73-74〕。

運期師、交州人也。与曇潤同遊。仗智賢受具。旋廻南海、十有余年。善崑崙音、頗知梵語。後便帰俗、住室利仏逝国、于今現在。既而往復宏波、伝経帝里。布未曾教斯人之力。年三十可。

運期師は交州の人である。曇潤と同遊し、智賢に従って受具する。南海に巡回すること10年あまり。崑崙語に通曉し、梵語をたいへんよく知っている。後に還俗して室利仏逝国に住み、今もそこに居る。すでに宏波を往復して、経を天子のもとに伝えた。未曾教を布くはこの人の力である。年齢は30ばかり。

運期はインドには至らなかったらしい。10年以上を南海各地に過ごし、崑崙語とサンスクリット語ともに通曉し、いまは還俗してシュリーヴィジャヤに住んでいるという。少なくとも1度は中国を往復している。なお、智賢は訶陵つまりジャワの人であることは同じ『大唐西域求法高僧伝』の会寧伝に記されている〔足立1942: 69-71〕。

大津伝に次のようにいう〔足立1942: 203-205〕。

遂以永淳二年（683）振錫南海。（中略）汎舶月余、達尸利仏逝洲。停斯多載。解崑崙語、頗習梵書。（中略）遂以天授三年五月十五日、附舶而向長安矣。今附訳雑経論十卷、南海寄帰内伝四卷、西域求法高僧伝兩卷。

ついに永淳二年（683）に錫を南海に振るう。（中略）舶を汎ること月余にして尸利仏逝洲に達する。ここに多年滞在し、崑崙語を解して、おおいに梵書を学ぶ。（中略）遂に天授三年（692）五月十五日に舶に乗り長安に向かう。いま訳雑経論十卷、南海寄帰内伝四卷、西域求法高僧伝兩卷を託す。

大津もインドには至らなかつたらしい。シュリーヴィジャヤに10年近く滞在し、崑崙語とサンスクリット語に通じるようになった。692年の帰国に際して義浄から訳経や著書『南海寄帰内法伝』『大唐西域求法高僧伝』を託されている。

貞固伝は次のようにいう〔足立1942: 238-239〕。

又貞固弟子一人。俗姓孟、名懷業、梵号僧伽提婆。(中略)見師主懷弘法之念、即有隨行之心。割愛抽悲投命溟渤、至仏逝国。解崑崙語、頗学梵書、誦俱舍論偈。

また貞固は弟子の一人である。俗姓は孟、名は懷業、梵号は僧伽提婆という。(中略)師匠に会って仏法を広める志を抱き、隨行する気になった。愛を割き、悲を抜き、命を溟渤に投じて、仏逝国に至った。崑崙語を解し、頗る梵書を学び、俱舍論偈を誦する。

貞固は義浄が689年文具と助手を求めて広州まで一時帰国した際にシュリーヴィジャヤに連れてきた4人の弟子の1人である。やはり崑崙語を解しサンスクリット語を学ぶという。

この義浄のいう崑崙語は通説にいうようにムラユ語(マレー語、インドネシア語)のことである。これはいわゆるシュリーヴィジャヤ碑文の言語であり、それはパレンバンを中心にスマトラ南部で、一定の長さのあるものが少なくとも9点見つかっている。うち3点には682、684、686年の紀年があり、その他も文字学的に同時期のものとされる〔深見2006: 58-59〕。すなわち、まさに義浄と同時代のものである。大津や貞固は広州からシュリーヴィジャヤに直航しており、その後に崑崙語を解するようになったが、運期の場合は南海各地を動いている間に通曉するようになったらしく、これは崑崙語が当時の海域東南アジアで共通語であったことを示すものであろう。ムラユ語刻文はスマトラ南部だけでなく中部ジャワでも7世紀から9世紀のものが少なくとも6点知られている〔Boechari 2012: 351-352〕。またフィリピンのマニラでも900年のムラユ語の銅板刻文が見つかっている〔ポストマ1994〕。

『隋書』巻81の流求国伝によれば、隋の610年の流求遠征に南方諸国の人が従軍し、そのなかの崑崙人が流求との通訳を務めた。

初(陳)稜將南方諸国人従軍、有崑崙人頗解其語、遣人慰諭之。流求不従。

初め陳稜は、南方諸国の人の従軍するなかに現地の言葉がよくできる崑崙人がいて、派遣してなだめ諭そうとした。(しかし)流求は従わなかった。

この流求は沖縄ではなく台湾であり〔桑田1993a: 69〕、その言語はムラユ語と同じオーストロネシア語族なので相互理解が比較的容易だったのであろう。台湾の言語がよくできるというのであるから、7世紀初めまでにオーストロネシア系の崑崙人が台湾で活発な交易活動を行っていたことがわかる。

崑崙語はムラユ語以外に、状況次第では真臘のクメール語や墮和羅のモン語をさすこともありうると思われるが、筆者はそのような事例を知らない。またムラユ語が海域東南アジアの共通語として広く用いられていたとすると、真臘や独和羅でも用いられた可能性があるが、カンボジアやタイの刻文にはその証拠は知られていないようである。

### (3) 崑崙の海商と広州

以下に義浄から離れて中国、具体的には広州にきた崑崙を取りあげる。

前項の最後で見た崑崙人がどこで隋軍に従軍したか不明だが、崑崙人の活動は7世紀初めまでに広東、福建に及んでいたと推測できる。つづいて7世紀後半から8世紀に崑崙の海商が広州の繁栄に貢献していることを示す史料がある。

「広州都督嶺南按察五府経略使宋公遺愛碑頌」なる碑文がある。広州都督などを務めた宋公つまり宋璟の離任に際して、その徳を慕う広州の人々が建てたものである<sup>21)</sup>。宋璟は『旧唐書』巻96、『新唐書』巻124に伝があり、清官として知られ治績もあったという〔中村1917(1):46;(2):47-48〕。『資治通鑑』巻212にも開元六年(718)正月に「広州吏民、為宋璟、立遺愛碑(広州の吏民が宋璟のために遺愛碑を立てた)」ことへの言及がある。都督はいままでもなく広域の行政権と軍事権を兼務する官つまり広東地方の最高権力者である。広州の繁栄と宋璟の治績を讃える碑文に続く頌詩の中に崑崙が登場する(碑文の著者張説の『張燕公集』巻7から引用する)。

崑崙宝兮西海財。幾万里兮歲一來。舟如島兮貨為台。市無欺兮路無盜。

崑崙の宝と西海の財が幾万里を越えて毎年一度やってくる。舟は大きな島のように(堂々とやってきて)、商品が台をなす(店に溢れる)。取引に騙しあいはなく、道に盗っ人はいない。

崑崙の宝が西海の財と対をなしている。崑崙の船と西域の船が毎年運んでくる商品が町にあふれて広州の町が繁栄と太平を謳歌する様が表されている。この崑崙はもちろん個別の国ではなく南海と同義の総称である。

広州都督が清官ばかりだったわけではなく、むしろ外国商人がつねづね貪官汚吏の苛斂誅求にさらされたことはすでに様々に先学の指摘するところである〔桑原1989; 中村1917; 和田1961〕。その挙げ句、あまりの横暴に堪えかねた崑崙が広州都督を殺すという大事件が起こった。宋璟離任の30年ほど前、光宅元年(684)のことである。『新唐書』本紀(巻4)は簡潔に記している。

七月戊午、広州崑崙殺其都督路元叡。

七月戊午、広州において崑崙がその都督の路元叡を殺した。

『資治通鑑』巻203に詳しい説明がある。

秋七月戊午、広州都督路元叡、為崑崙所殺。元叡闇懦、僚属恣横、有商舶至、僚属侵漁不已、商胡訴於元叡、元叡索枷、欲繫治之。群胡怒、有崑崙袖劍直登聽事、殺元叡及左右十余人而去、無敢近者、登舟入海、追之不及。

秋七月戊午、広州都督の路元叡が崑崙に殺された。元叡は愚かで気が弱く、属僚たちがほしいままに悪事を働く。商船がやってくると、属僚たちの不法なむさぼりの止むことがない。外国商人たちは元叡に訴えたが、元叡は彼らを縛り上げて投獄しようとした。怒っ

た外国人がつめかけ、その中から崑崙人が袖に剣を隠し持って役所に乗りこみ、元叡と左右の10人余りを殺して立ち去った。あえて近づこうとする者はなく、舟に乗って海に出てしまい、追跡したが追いつけなかった。

小説「崑崙奴」の磨勒の活躍を彷彿させる活劇が展開されたようである<sup>22)</sup>。

広州の外国商人たちはおおいに溜飲を下げたことであろう。その後彼らとくに崑崙人に対する処罰、弾圧があったかと想像されるが筆者にはそのような史料は不明である〔中村(1): 44-45; 和田1961: 1052参照〕。『資治通鑑』では非は全面的に都督路元叡にあるとされており、そして後任の都督には清官として名高い王方慶が任命されているので報復はさほど厳しくなかったかもしれない。『旧唐書』巻89王方慶伝も次のように述べて、路元叡(叡)の非を指摘する。

永淳中、累遷太僕少卿。則天臨朝、拜広州都督。広州地際南海、毎歳有崑崙、乗舶以珍物与中国交市。旧都督路元叡、冒求其貨、崑崙懷刃殺之。方慶在任数載、秋毫不犯。(中略)。当時議者、以為有唐以来治広州者無出方慶之右。

永淳(682-683)中、累遷して太僕少卿となった。則天が朝に臨み、広州都督を拜命した。広州の地は南海に面し、毎歳崑崙人が船に乗ってきて、珍物をもたらして交易する。旧都督の路元叡がその商品をむさぼり求めたため、崑崙人が刃を隠し持ち元叡を殺した。方慶は数年におよぶ任期中にはほんの少しも悪事を働かなかった。(中略)。当時、唐の建国以来広州を治める者で方慶の右に出るものはいないと評判だった。

この王方慶伝でも毎年船に乗ってやってくる崑崙人が広州の繁栄の源であることが記されている。

船に乗って広州にやってくるのはもちろん崑崙だけではない。元開『唐大和上東征伝』が、日本渡航を企てた鑑真一行がはるか海南島に漂着した後の750年に広州で見た様子を次のように伝えているのが参考になる。

江中有婆羅門・波斯・崑崙等舶、不知其数。並載香菓珍宝、積載如山。舶深六七丈。師子国・大石国・骨唐国・白蛮・赤蛮等往来居住、種類極多。〔後略〕

川の中に婆羅門(インド)・波斯(ペルシャ)・崑崙等の船舶が無数にあり、みな香菓・珍宝を山のように積載している。その船舶は深さは六、七丈もある。師子国(セイロン)・大石国(=大食、アラブ)・骨唐国・白蛮・赤蛮<sup>23)</sup>等が往来居住していて、その種類がたいへん多い。

南海交易の中心港市として繁栄する広州の町の様子が語られていて、それに崑崙船も関わっていることがわかる。

#### (4) 崑崙船

広州にくる外国船に婆羅門船・波斯船とならんで崑崙船があがっている。文脈からすれば師

子船や大食船もあったことだろう。それらの多寡や優劣について手がかりは限られている。そのなかで8世紀末ころの広州の様子を伝えるといわれる李肇『唐国史補』巻下によれば師子国船が最も大きい。

南海船、外国船也。毎歳至安南・広州。師子国船最大、梯而上下数丈。

南海の船は外国船である。毎年安南（交州、ハノイ）や広州にやってくる。師子国の船が最大で、梯子で数丈を昇り降りする。

引用の冒頭は、南海を往来するのは外国の船であるという。中国の航洋船はまだ登場していないのである。師子国の船が最大という。唐代の丈は3メートル余ということなので、船倉は2丈で6メートル、3丈で9メートルをこえる深さがあることになる。

この少し前の天宝二年（743）、高名な密教僧の不空が玄宗の勅書を奉じて僧俗21人を従えて広州から師子国と五天竺に向かったが〔藤善2013〕、その乗船は贊寧『宋高僧伝』巻1不空伝などによれば崑崙船であった。崑崙船は中国だけでなくインド方面でも活動していることがわかる<sup>24)</sup>。この国家使節の船が崑崙船であったのが仮に偶然であったとしても、崑崙船が他の外洋船（天竺船・師子国船・大食船・波斯船など）より少なくとも劣っていないことの証左であろう。このことは次の史料からもうかがえる。

崑崙船の構造をうかがわせる史料がある。先にもあげた慧琳『一切経音義』の巻61の破船の条である〔神田1931〕〔ニーダム1981: 100-101参照〕。

破船。下音白、司馬彪注莊子云、海中大船曰船。広雅、船海舟也。入水六十尺、駟使運載千余人、除貨物。亦曰崑崙船。運動此船多骨論為水匠。用椰子皮為索連縛、葛覽糖灌、塞令水不入。不用釘鑿、恐鉄熱火生。梲木枋而作之、板薄恐破。長数里、前後三節、張帆使風、亦非人力能動也。

破船。第2字は白と発音する。司馬彪は『莊子』の注で、「海船の大きなものを船という」と述べる。『広雅』（辞典）によれば、船は航洋船である。水中に60尺(?)沈む。速くて、積み荷の他に1000人以上を乗せる。崑崙船とも呼ばれる。この船を動かすにはたいてい骨論人を船長にしている。ヤシの外皮(の繊維)を紐にして(船の各部を)縛ってつなぎ、(隙間は)葛覽の糖でふさいで水が入らないようにする。釘やかすがいを用いない。鉄が熱して火事になるのを畏れるからである。側板を張り重ねて作る。板が薄いために船が壊れるのを恐れるからである。長さは数里(?)、前後に3つに分割されている。帆を張って風を用い、人力で動かすことができるものではない。

破船なる語の解説であるが、実際には船とくに崑崙船の説明になっている。航洋船がすべて崑崙船ではないはずだが、外国船のなかで崑崙船がとくに多かったのであろうか。いずれにせよ、崑崙船のいくつかの特徴が明らかになる。

大型帆船である。貨物の他に1000人以上を乗せるという。ただし原文の「六十尺」は誤りと思われる。六十尺は不自然で、六丈とすればよいし、20メートル近いのは深すぎるであろう。「六七

尺」なら2メートルほどである。長さについて「数里」はあまりに長すぎるので、何らかの間違いが含まれているであろう。

縫合船である。釘やかすがいなど鉄を用いないのは火事を避けるためという。板を紐で縛り、隙間は糖でふさぐ。なお「椰子皮」は次項参照、また「葛覧」は次項の檣櫓の誤りまたは同義語と思われる。

隔壁がある。「前後三節」というから2枚の隔壁があったと考えることができる。後に登場するジャンク船の特徴とされる隔壁の原型かもしれない。「櫓木枋而作之」もジャンク船の特徴である。

崑崙人が動かす。この船を動かすのは骨崑（崑崙の異字）である。「水匠」を訳文では船長の意味で解したが乗組員の意味かもしれない。船大工たちも崑崙だっただろう。

この史料から、8世紀後半ないし9世紀初めの中国人に縫合船の概略が知られていたことがわかる。それが崑崙船と呼ばれており、中国人僧侶が崑崙船をとおして縫合船の知見を得たのは、彼らの南海往来がとくに崑崙船と関係が深かったからかもしれない。

#### (5) 中国人に縫合船を教えた

少し時代が下って9世紀末ころの広州で縫合船が建造されている目撃情報がある。そのころ広州に滞在した劉恂の見聞録『嶺表録異』である、その巻上の賈人船の条にいう<sup>25)</sup>。

賈人船不用鉄釘、只使枕榔鬚繫縛。以檣櫓糖泥之、糖乾甚堅、入水如漆也。

商人の船は鉄釘を用いず、ただ枕榔の鬚を使って束ねて繋ぎ、檣櫓の糖でこれに塗りこむ。その糖は乾くと非常に堅くなり、水に入れるとちょうど漆のようである。

広州で建造する商船は鉄釘を用いず、枕榔の紐で縛り、檣櫓の糖で隙間を埋めるといふ。枕榔と檣櫓については同書の巻中に枕榔樹の条、檣櫓の条がある。

枕榔樹。枝葉並蕃茂、与棗檳榔等小異。然葉下有鬚、如羸馬尾。唐人採之、以織巾着子。其鬚尤宜鹹水浸漬、即羸脹而靱。故人以此縛船、不用釘線。

枕榔樹。枝葉がまとまって繁茂するのは棗や檳榔などに似る。しかし葉の下に粗い馬の尾のような鬚がある。唐人の人はこれを採取して織り頭巾を作る。その鬚の最も都合がよいのは潮水に漬けると大きく膨れてしなやかなことである。それゆえ人々はこれで船を縛り釘や針金を用いない。

檣櫓。(中略) 樹枝節上、生脂膏、如桃膠。南人採之、和其皮葉煎之、調如黑錫。謂之檣櫓糖。用泥船損、乾後堅于膠漆、著水益乾耳。

檣櫓。(中略) 枝の節に桃の樹から出るヤニのような樹脂が生じる。華南の人々はこれを採取して、この樹の皮や葉と一緒に煮詰めてタール状のものを作る。これを檣櫓糖とよぶ。船の損傷箇所詰めると、乾いたら膠や漆より丈夫であり、水に漬かると水をはじく。

枕榔はシュロの一種かと思われる。他の用途もあるがとくに縫合船に用いられることが記されている。先の慧琳の崑崙船の説明では「椰子皮」の紐が用いられる。椰子皮の紐はココヤシの

実の中果皮の繊維を漉したものと思われるが、サトウヤシの幹の繊維ならばシュロとよく似ている。橄欖の糖についてはその作り方と船体の充填剤に用いることが記されている。慧琳の崑崙舶の説明で葛覽糖とされるのとおそらく同じものであろう。

枕榔の紐を用いるのは「唐人」つまり広州の人であり、橄欖の糖を用いるのは「南人」つまり華南の人あるいは嶺南の人である。縫合船の造船技術が広州の中国人に移転されたのである。桑原隲蔵は劉恂の見たものを当初シーラーフ船と考えたが〔桑原 1989: 134〕、後の論文で見解を変えて「南人」つまり華南の中国人の造船術であるとする。その根拠は第一に、劉恂が広州にいたころシーラーフ船は来航せず、第二に、同じ『嶺表録異』が枕榔樹の髭と橄欖糖の利用を「南人」<sup>26)</sup>の技術としていることである〔桑原 1968 3: 504-505〕。桑原は技術移転によるものか独自発生か不明とする。他方和田久徳は中国側が西アジアの造船術を受容したものにちがいないと断じる〔和田 1985: 8〕。和田が移転元を西アジアとする理由は不明である。上記(4)項の崑崙舶の説明も踏まえて崑崙舶の可能性が大きいというべきであらう<sup>27)</sup>。

## おわりに

崑崙の人々は形質的に直髪褐身であり、彼らを卷髪黒身とするのは史料の誤りである。この誤りが生じた原因はよくわからないが、その背景には崑崙と崑崙奴の混同がある。この混同は、唐代に鬼のような形象の崑崙奴のイメージが文学作品や美術作品で愛好されたため増幅されたのであった。義浄の指摘は看過され、この誤りはおもに『旧唐書』林邑伝の一文によって今日まで維持されてきた。

崑崙奴や悪鬼羅刹イメージの呪縛から離れて唐代南海の崑崙を見るならば、崑崙は海域東南アジアの国々、人々をさす総称である。史料には総称である崑崙が用いられる場合と真臘や室利仏逝など個別の国名が用いられる場合がある。本稿では総称の崑崙を検討した。彼らは仏教世界では中国以上の文明を有し、ムラユ語という共通語を用い、造船と航海に秀で、大型船を駆使して各地に富と繁栄をもたらす海商であった。広州都督らを殺した崑崙のように武術に秀でた者もいた。崑崙舶の活動は中国にもインドにも及んでいた。彼らの船は縫合船であった。南海を歴遊する中国人僧侶が崑崙舶に乗ることも多かったようであり、広州の中国人に縫合船の造船術を教えたのは崑崙人の可能性が高い。

こうして真臘や室利仏逝など南海諸国の個別の国ごとの記述からは見えない海域東南アジアの崑崙の姿が浮かんできた。唐代には崑崙という語で海域東南アジアがひとつの世界として把握されていたことがわかる。このことは、海域東南アジアの各地域を個別にのみ捉えるのではなく、海域東南アジアをひとつの歴史的世界として認識する必要性あるいは根拠を提示するものである。

今後の課題としてさしあたり3点述べておきたい。第一に唐代の崑崙に関する史料のいっそうの収集と分析である。第二に総称の崑崙と個別の国との関係をどのように捉え、海域東南アジア史像をどのように描くか検討する必要があるだろう。そして、崑崙の活躍は次の時代に継続されるかどうかである。

## 文献

漢籍（正史など通有のものは除く）

『大正新修大藏經』100巻、大蔵出版、1924-1934年

慧皎『高僧伝』、『大正新修大藏經』巻50、No.2059

慧琳『一切経音義』、『大正新修大藏經』巻54、No.2066

道宣『続高僧伝』、『大正新修大藏經』巻50、No.2060

義浄『大唐西域求法高僧伝』、『大正新修大藏經』巻51、No.2066（足立1942参照）

義浄『南海寄帰内法伝』、『大正新修大藏經』巻54、No.2125（宮林2004、王1995参照）

義浄訳『根本説一切有部百一羯磨』、『大正新修大藏經』巻24、No.1453

元開（淡海三船）『唐大和上東征伝』、『大正新修大藏經』巻51、No.2089

賛寧『宋高僧伝』、『大正新修大藏經』巻50、No.2061

李肇『唐国史補』3巻、上海古籍出版社、1957年

劉恂『嶺表録異』3巻、芸文印書館、1969年（百部叢書）

張説『張燕公集』25巻、5分冊、芸文印書館、1969年（百部叢書）

研究

浅湫毅1993「薬師寺金堂本尊台座の異形像について」『佛教藝術』208:53-71.

浅湫毅1996「伎楽面の崑崙をめぐり一考察」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』539:4-19.

足立喜六訳注1942『大唐西域求法高僧伝』岩波書店

生田滋2004「海域東南アジア史研究の回顧と展望」『東洋史研究』63-3:132-143.

石田幹之助1945『南海に関する支那史料』生活社

伊東利勝2001「綿布と旭日銀貨——ピュー、ドヴァーラヴァティ、扶南」『岩波講座東南アジア史1』岩波書店：199-226.

神田喜一郎1931「崑崙舶」『南方土俗』1-2:127-128.

黒田真美子2006「崑崙奴 裴綱撰」黒田真美子『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他』明治書院：436-451.

桑田六郎1993a「南洋崑崙考」（原著1934）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院：63-72.

桑田六郎1993b「崑崙奴と僧祇奴」（原著1939）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院：107-110.

桑田六郎1993c「日南、林邑に就いて」（原著1942）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院：151-181.

桑原隲蔵1968『桑原隲蔵全集』5巻、岩波書店

桑原隲蔵1989『蒲壽庚の事績』（原著1935）平凡社（東洋文庫）

駒井義明1932「崑崙考」『歴史地理』59-4:86-92.

中村久四郎1917「唐時代の広東（1）-（4）」『史学雑誌』28、3-6:（1）28-3:36-52;（2）28-4:28-48;（3）28-5:67-75;（4）28-6:1-24.

ニーダム、ジョセフ著、坂本賢三他訳1981『中国の科学と文明 第11巻 航海技術』思索社

深見純生2006「パレンバン再考——1400年の都市」東南アジア考古学会編『東南アジア考古学会研究報告』4:57-71.

深見純生2016「南海の崑崙再考」深見純生編『東南アジア古代史の複合的研究』桃山学院大学総合研究所（科研報告書）：13-25

深見純生2019「七世紀の東西回廊を行く——玄奘・那提・義浄——」肥塚隆編『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版：63-88.

藤善真澄（訳注）1991『諸蕃志』関西大学出版部

藤善真澄2013「金剛智・不空渡天行釈疑」藤善真澄『中国仏教史研究——隋唐仏教への視角』法蔵館：369-384.

ポストマ、アントン著、小川英文訳1994「ラグナ銅板の発見」宮本勝・寺田勇文編『アジア読本 フィリピン』河出書房新社：179-184.

松田寿男1987「崑崙国致」（原著1941）松田寿男『松田寿男著作集第四巻』六興出版：251-275.

宮林昭彦、加藤栄司訳2004『現代語訳 南海寄帰内法伝——七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法蔵館

- 家島彦一 1993『海が創る文明』朝日新聞社
- 家島彦一（訳注）2007『中国とインドの諸情報』2巻、平凡社（東洋文庫）
- 和田久徳 1961「唐代における市舶使の創置」『和田博士古稀記念東洋史論叢』講談社：1051-1062.
- 和田久徳 1985「前近代アジアの海上交通」『南島』5: 1-19.
- 陳佳榮・謝方・陸峻嶺 1986『古代南海地名彙積』中華書局
- 費瑯（Ferrand）著、馮承鈞訳 1931『崑崙及南海古代航行考』商務印書館
- 王邦維（校注）1995 義浄原著『南海寄帰内法伝』中華書局
- Boechari 2012: “Preliminary Report on the Discovery of an Old Malay Inscription at Sojomerto”, Boechari, *Melacak Sejarah Kuno: Indonesia Lewat Prasasti*, Jakarta: 349-360.
- Ferrand, G. 1919: “Le K’ouen-louen et les anciennes navigations interocéaniques dans les mers du sud”, *Journal Asiatique*, Mars-Avril, 1919: 239-333; Mai-Juin, 1919: 431-492; Juillet-Août, 1919: 5-68; Sept-Oct., 1919: 201-241.
- Reid, Anthony 1993: *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume Two : Expansion and Crisis*, Yale University Press.
- Stein, R. A. 1947: “Le Lin-yi: Sa localisation, sa contribution à la formation du Champa et ses liens avec la Chine”, *Han-hiue: Bulletin du Centre d’Études Sinologiques de Pékin*, 2, 1-3: 1-476.
- Takakusu, J. (高楠順次郎) tr. 1896: *A Record of the Buddhist Religion as Practiced in India and the Malay Archipelago (A.D. 671-695)*, Oxford.
- Yule, Henry and A. C. Burnell, New Ed. By William Crooke 1969: *Hobson-Jobson A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*, London.

## 注

- 1) 本稿は旧稿「南海の崑崙再考」(深見 2016) を大幅に加筆修正したものである。旧稿にご意見いただいた方々に感謝申し上げる。とりわけ名古屋大学大学院東洋史研究室の林謙一郎教授には『蛮書』の崑崙（「はじめに」で取りあげるフェランの e）や広州都督宋璟の碑文などについて貴重なご教示をいただいた。
- 2) フェラン論文については石田幹之助の解説、松田寿男の研究史略説、馮承鈞による抄訳を参照〔石田 1945: 90-93; 松田 1987: 252-254; 費瑯 1931〕。フェランが取りあげていない史料もあり、フェランの訳文に誤りがあることは桑田六郎が指摘している〔桑田 1993a〕。
- 3) 林邑の民俗学的、言語学的側面についてのスタインの論文〔Stein 1947〕も崑崙に言及するが、唐代の崑崙と直接関係しないので本稿の枠外である。
- 4) 南海関係の漢籍に造詣の深い桑原隲蔵は「この記事に従えば、崑崙とは主として Negrito のごとき巻髪黒身の種族を指すべきも、実際としては支那の記録に見ゆる崑崙国は、いま少しく広義に、直髪褐身の Malay 種族の蟠居せる南海諸国をも包有すること疑惑を容れず」と指摘する〔桑原 1989: 120〕。ただし桑原はこの問題にこれ以上立ち入らない。また、崑崙をマレー系に限定すると、後に述べるように、クメール系（真臘）やモン系（独和羅、ドヴァーラヴァティー）が崑崙から除外されるという不都合も生じる。
- 5) このうち『旧唐書』林邑伝では、伝の中程で表 1 のように「拳髮色黒」とあり、末尾で「巻髪黒身」とする。巻と拳は同義であり、また鬚や捲という異字もある。本稿では引用を除き巻を用いる。
- 6) ネグリティ系は背が低いのでこの崑崙には適合しない。一般に崑崙は背が低いとされ、背が高いというのはこの史料だけである。ただしこの「長」は面長の意味かもしれない。
- 7) 南北朝期には既述のように扶南・頓遜・盤盤の王や高官の名前や称号としての崑崙がある。また南朝の宋が林邑を攻めたときの記述のなかで 2 回崑崙に言及されるが（酈道元『水経注』巻 36）、崑崙人に直接関わるものではない。
- 8) 黒田は崑崙奴の供給源のひとつとして戦争捕虜をあげ、具体例として『旧唐書』巻 184 楊思勳伝を示すが、同伝には崑崙の語は見られない。黒田はまた奴隷交易により連れてこられた人々に関する史料として周去非『嶺外代答』巻 3 をあげている。その「崑崙層期国」の条をさしていると思われるが、この国はアフリカ東海岸に位置する〔藤善 1991: 199-200〕。唐代にアフリカ黒人（後述の慧琳のいう僧祇）が連れてこられ

- たことを示すには、宋代の『嶺外代答』よりも『旧唐書』『新唐書』などの訶陵伝や室利仏逝伝が適している（注11参照）。
- 9) 表1の4国のうちこの形質の特徴が該当するのは色黒・拳髪・垂耳の真臘である。真臘伝には崑崙奴イメージが反映しているのであろうか。
  - 10) 伎楽における崑崙は、「呉女」すなわち漢民族の女性に懸想して痴態を繰り広げ、「力士」に成敗されるという道化の役回りである〔淺湫1996:11-12〕。
  - 11) 室利仏逝が「侏儒、僧祇女各二」を献上したことは『新唐書』巻222下室利仏逝伝に見え、それが開元十二年(724)であったことは『冊府元龜』巻971などから明らかになる。また訶陵が元和八年(813)に「僧祇奴四」(『新唐書』巻222下)、元和十年(815)に「僧祇童五人」(『旧唐書』巻197)、元和十三年(818)に「僧祇女二人」(『唐会要』巻100)を献上したことが諸書の訶陵伝に見える。
  - 12) 『唐会要』巻99甘棠国伝、『太平寰宇記』巻177甘棠国伝、『太平御覽』巻788甘棠国伝にはほぼ同文がある他、『冊府元龜』巻970に關係記事があり、『新唐書』は巻222下環王伝の付加部分で「(貞觀)九年、甘棠使者入朝、国居海南」という。この九年は他の史書に照らして十年の間違いである。
  - 13) 羅刹国では火珠(ある条件下で発火する水晶のような珠)を産し、林邑が貞觀四年(630)の朝貢の際にこれを献上したこと(『新唐書』巻222下環王伝ほか)、また同年中国の使節が羅刹国まで至っていること(『唐会要』巻99婆利国伝ほか)。
  - 14) 9世紀半ばのアラブ史料『中国とインドの諸情報』にはアンダマン・ニコバル諸島に「黒く、ちぢれ毛で、人を欺くような卑屈な顔と目」の裸体の食人種がいるとか、「黒人種の裸族」の食人種がいて異能(潜水)の主であるとか語られている〔家島2007-1:29,42,99-101,146〕。海域アジアの船乗りや海商達のあいだにこうした鬼畜羅刹の類の異能の主といった驚異譚が共有されていたのであろう。ただし、『大唐西域求法高僧伝』中の義浄自身のニコバル諸島の目撃証言では、裸体としつつも食人とは述べず「其人容色不黒、量等中形(その人の容色は黒くなく、背格好は中程度である)」とする〔足立1942:139,142〕。アラブ史料には驚異譚に仕上げるための誇張があるのだらう。
  - 15) ついでながら、タカクスは南海録を独自の書とはみなさず後に第11章で述べるとするが、第11章には対応する記事はないので、明らかに誤訳である。義浄に『南海録』という著作があることは学界にほとんど知られていないのである。宮林は「この書は散逸して現在に伝わっていない」と注記する〔宮林2004:14〕。王は『宋史』巻204芸文志が記す、著者名なく「地理書類」に分類される「南海録」1巻かもしれないとする〔王1995:18〕。
  - 16) 松田はその一方で、「崑崙国と南海諸国との間に区別を認めず、漠然と同じ意味に使用したものがあり、恐らく一般にはそう考えられていたろうと察せられる」と認め、また「崑崙は、ややもすれば南海と混用された」という。つまり崑崙は南海と同義で用いられる場合があったこと認めている〔松田1987:270〕。
  - 17) 義浄『南海寄帰内法伝』にはまた「東裔諸国」すなわち(インドの)東のはての諸国という語があってナランダーから東、臨邑までをいう〔宮林2004:12-13;王1995:12〕。
  - 18) 義浄がインドの往復とも立ち寄った羯荼(マレー半島のクダ)や『大唐西域求法高僧伝』で3回言及する郎迦戌(ランカスカ、マレー半島のパタニ)が先の南海諸洲列挙にあがっていない。これがマレー半島もまた瞻部洲に属し南海ではないという地理観にもとづくのであれば、今日の島嶼部と大陸部の区分とはずれがある。しかし義浄は『大唐西域求法高僧伝』で羯荼に5回言及するうち初回は「南海羯荼国」と記している〔足立1942:114〕。
  - 19) ただし南蛮伝の範囲は東南アジアにとどまらずインド洋方面にはみだすこともある。たとえば『梁書』『南史』の中天竺国と師子国、また『新唐書』の瞻博国。
  - 20) 真臘が崑崙諸国の一つであることは道宣『続高僧伝』巻4の那提三藏伝にも示されている。インド出身の学僧那提は「南海諸国」を歴遊の後、655年長安に至り大慈恩寺に入ったもののふさわしい立場を与えられず、翌656年「勅往崑崙諸国、採取異薬。既至南海云々(勅命をえて崑崙諸国に往き、異薬を採取することになった。すでに南海に至ると云々)」という。そして663年再び大慈恩寺に入ったが、やはり冷遇され、同年「南海真臘国」の求めに応じてその国へと去った〔深見2019:70-73参照〕。ここでは南海と崑崙は同義語として用いられている。なお、那提伝でその具体名がわかるのは真臘だけである。
  - 21) 碑文自体には年月が記されていないが、『資治通鑑』などから開元四年(716)十二月の離任後まもなく建

- てられたと考えられる〔中村 1917 (1): 46; (2): 47-48〕。
- 22) 和田久徳は唐代の市舶使の設置と改廃に関する論文の中でこの史料を引用し、また広州都督の路元叡と王方慶にふれるが、開元二年（714）に初めて市舶使が任命されたこととこの事件との関係はとくに論じない。おそらくその関係を直接示唆する史料は見当たらないのであろう〔和田 1961: 1051-1053〕。以下は想像だが、取引や課税の適正な管理の他に治安対策も市舶使任命につながったかもしれない。犯人は逃げおおせたらしいが旧暦7月から南への航海時季まで3カ月ほど匿われてから出航したかもしれないとすると、治安対策として外国船と外国人の管理が重要になる。
  - 23) 骨唐は先に見たように（第1節（3）項）『一切経音義』の崑崙語の条の骨堂の異字かもしれない。とすると、骨唐は貞観十年（636）に朝貢した崑崙人の甘棠国かもしれないが、それ以上のことはわからない。白蛮と赤蛮は内陸の少数民族と思われるが詳細不明である。
  - 24) 崑崙船のインド航路は義浄も利用している。義浄は672年羯荼（マレー半島のクダ）から耽摩立底（ガンジス河口のタームラリプティ、現タムルック）まで「王舶」に乗っている〔足立 1942: 139, 142〕。王舶とは羯荼国王の船だが、崑崙船ということもできよう。
  - 25) 訳文は家島彦一を参照した〔家島 1993: 78〕。なお家島は枕榔をシュロの一種とし、橄欖を熱帯に産する果樹の一種とする。
  - 26) 桑原は枕榔の紐を用いるのも「南人」とするが、正しくは「広人」である。
  - 27) ここにあげた史料とおそらく直接は無関係だが、中国語のジャンク junk の語源をジャワ語やムラユ語のジョン jong やアジョン ajong（船または大型船）に求める説がある〔Yule 1969: 472; cf. Reid 1993: 36-43〕。